

(2) 明度と彩度のものさし¹⁾

色の明度と彩度は図-3のように表される。全ての色相で同様のものさしがつくれる。

(3) 有彩色と無彩色

図-3では、左端の一行がNと書かれていて、まったく色味がない。Nというのは色味のない色、無彩色のことで、彩度が0である。無彩色は、明度（明るさ）だけで表すことができる。

(4) 色立体¹⁾

色相、明度、彩度を一度に表そうとすると、下の写真の様になる。これが、色の世界を模式的に表した「色立体」というものである。

中心の縦軸が無彩色である。上の方ほど明るく、外側に向かうほど鮮やかになっている。



JIS修正マンセル色立体 (日本色研)

図-4

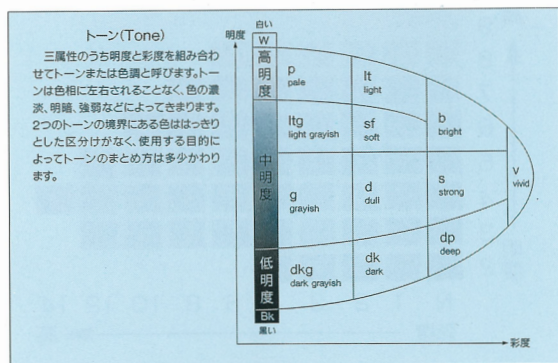


図-5

(5) 明度+彩度=色調 (トーン)²⁾

三属性の内明度と彩度を組み合わせて色調 (トーン) と呼ぶ。色調は、色相に左右されることなく、色の濃淡、明暗、強弱などによって決まる。色調の境界の色は、はっきりとした区分けはなく、使用目的によって多少変わることもある。

3. 周辺環境との調和のさせかた

よりよい景観にするための色彩の使い方を考えると、人間がつくり出すものの色をきちんとコントロールして自然の色彩と調和させることが重要である。また、景観にまともをもたせることも必要である。

景観において、色彩の調和を図る方法としては大きくふたとおりの考え方がある。

① 周りにとけ込ませる。(類似調和)

周辺とよく似た色、なじむ色を使うと穏やかな景観になる。



図-6

② 周りから際立たせる。(対比調和)

周辺とはっきりと違う色を使うとくっきりとした景観になる。

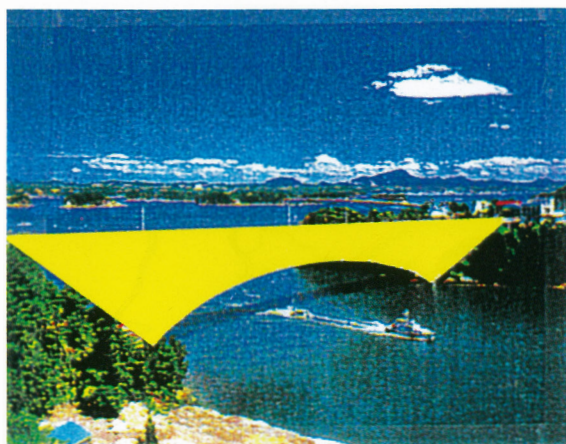


図-7

また、景観においてまとまりをもたせる方法には、次のふたとおりの考え方がある。

①色相でまとめる。

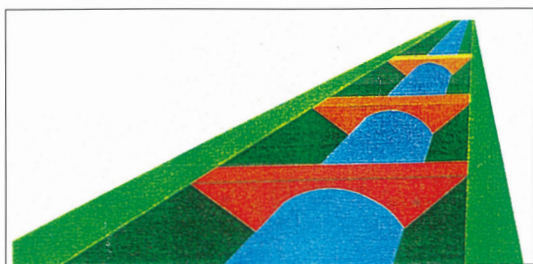


図-8

②色調（トーン）でまとめる。

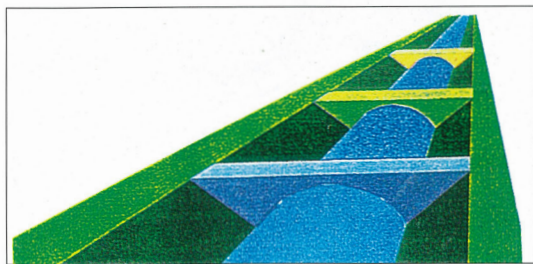


図-9

4. 構造物色彩の考え方

前項で述べた調和のさせかたを基本に、これからは具体的な構造物色彩の考え方を述べるために、下に示すようなゾーン分けをした、A都市河川を例にとり行う。

(図-10)

①A 1 ゾーン

グラウンドやゴルフ場の高水敷利用という都市型の景観を有するゾーンであるが、背景にある山並みがつものどかな印象が強いゾーン。基本的には、緑を美しく引き立てるような色彩の展開を行うために、ナチュラルカラーを中心とした色彩で構成する。

②A 2 ゾーン

これも都市型の景観を有するゾーンではあるが、河川景観の中に背後地の構造物やビルなどが印象づけられるところである。都会的イメージや、モダンなイメージを指向し周辺との調和を考慮した色彩で構成する。

③B ゾーン

海浜部のもつ爽やかな景観イメージを持ち、水のしめる割合が高く、開放的でクール、ダイナミックといったイメージを指向する色彩によって構成する。

4-1 基本方針

代表的構造物は、その周辺地域の景観イメージを構成する要素の中で重要な役割を果たすものである。従ってこれらの色彩を提案する際には、地域の景観イメージ構成を十分把握し、その中で構造物の位置づけを明確にし、周辺の景観イメージからかけ離れた色彩とならないように注意が必要である。

そこで、構造物の色彩提案にあたって、一般的に基礎方針となるものは以下のようなことが上げられる。

- ・河川景観の全体的イメージに調和する色彩であること。
- ・地域特性と調和する色彩であること。
- ・景観主調色（背景色）と調和する色彩であること。
- ・河川の構造物らしい色彩であること。（橋梁らしさ、水門らしさ）
- ・柔軟な色彩展開が可能な色彩群であること。

■ゾーニング図

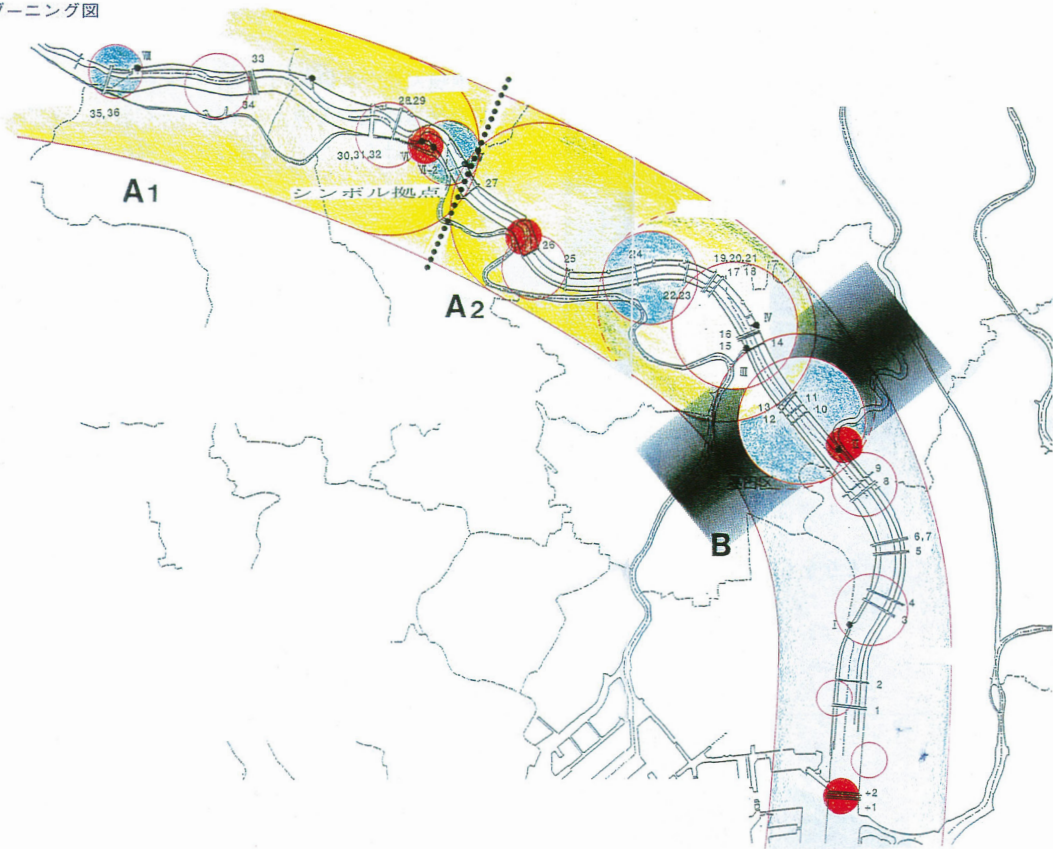


図-10

4-2 色彩範囲

基本方針を踏まえ、構造物の色彩の方向性を明確にし、周辺景観と不調和にならないように、構造物の色彩範囲を提案することとする。

この色彩範囲は、周辺の環境色彩と既存の施設色彩との間で調和、不調和を評価した結果（図-11）、得られたデータをもとに、調和しやすい色彩の色調（トーン）及び色相を選定するという方法で行った。（図-12）

この中より選ぶことで、この川のそれぞれのゾーンにおける周辺環境の色彩と比較して、少なくとも不調和にはならないと考えられる。

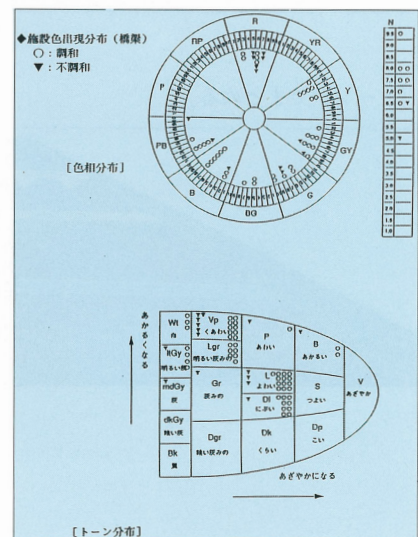


図-11

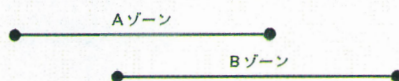
■カラートーンスケール このスケールは縦軸に12トーン、横軸に10色相をとり、120色を体系化したものである。

色相	R	YR	Y	GY	G	BG	B	PB	P	RP
トーン										
p	pale									
lt	light									
b	bright									
v	vivid									
s	strong									
dp	deep									
sf	soft									
d	dull									
dk	dark									
ltg	light grayish									
g	grayish									
dkg	dark grayish									

◆様々な色彩の中から、・・・

◆設定範囲

色相	R	YR	Y	GY	G	BG	B	PB	P	RP
トーン										
lt	light									
s	strong									
d	dull									
ltg	light grayish									



◆おおまかな色相範囲の傾向

図-12²⁾

5. おわりに

今回は、色の持つ3要素のうち色調（明度、彩度）をメインに色彩の調和を図るという手法を行った。そのためには、現地色彩調査を実施し周辺と調和しているもの、していないものを見極めた上で色調等を決定している。しかし、これを他河川において利用するには、当然そこにはその色があるため、ここで述べた色彩範囲そのものになるとは限らない。

十分に色彩調査をしたうえでその河川の周辺色等にあう色調（トーン）、色相を設定していくべきであろう。

- 1) 日本規格協会；
JISハンドブック色彩
- 2) 日本ペイント株式会社編集；
カラーテキスト I（基礎編）